

航路啓開業務について

姫野 修

ここに掲載しました資料「航路啓開業務について」は、先の大戦の直後から一貫して航路啓開業務に従事し、この業務を通じて、戦後の我が国の復興と独立、そして発展に貢献された方々のお一人である姫野修氏が、この業務に大変縁のある海上自衛隊呉地方隊の開隊三十周年記念日（昭和五十九年十月四日）に際し、同隊の隊員にお話しされた内容をまとめたものです。

その内容は、我が国が実施してきました航路啓開業務と、その業務を引き継いだ海上自衛隊掃海部隊の発足の歴史を端的に物語るものです。

この資料は、往々にして埋もれがちであった我が国の戦後史の一端を示す好個の資料であり、この史実を広く皆様にご覧いただけるよう、姫野修氏のご了解を得た上でここに掲載した次第です。

平成13年9月26日

海上自衛隊 掃海隊群司令

海将補 河村 雅美

目次

まえがき

- 一 飢餓作戦
- 二 終戦処理業務
- 三 運輸省、海上保安庁時代
- 四 朝鮮掃海
- 五 恒久平和のために

あしがき

まえがき

昭和二十九年七月一日呉地方総監部が開設され、呉地方隊が発足して三十年、今日の盛儀を迎えられましたことを皆様とご一緒に心からお祝い申し上げ、益々のご発展を祈念するものであります。これからお話申し上げます航路啓開業務は、大東亜戦争の終戦から戦後復興に至る激動の時代であり、所管も海軍省から第二復員省、復員庁（復員省）、運輸省、海上保安庁、保安庁警備隊、防衛庁と変わりました。

一、飢餓作戦

航路啓開業務について語るにはその前提として米軍のとったわが海上交通路の封鎖、所謂「飢餓作戦」からお話せねばなりません。

大東亜戦争も最終段階に入った昭和二十年、南方占領地を手放し中国大陸と固有の四つの島に守りを固めた日本に対して米

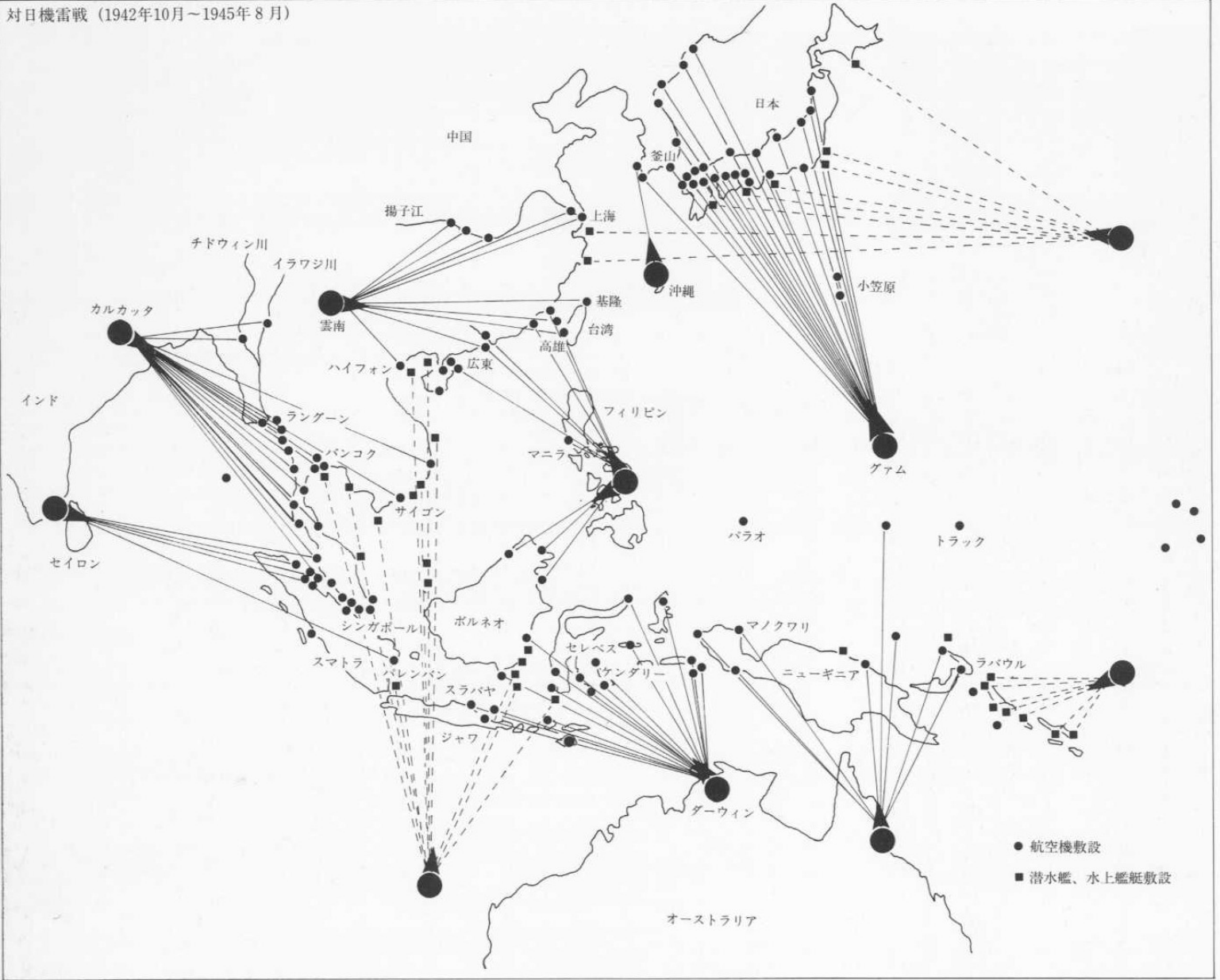
軍のとった作戦は、主要都市や工業地帯、軍事基地等に対する空襲と飢餓作戦 兵糧攻め でした。

対日飢餓作戦は、食糧その他戦略物資の海上輸送を潜水艦と機雷敷設により阻止しようとするもので、この目的で日本周辺に一万一千個余の磁気・音響・機雷・水圧等の各種感応機雷が敷設されわが海上交通は危殆に瀕し経戦能力は急速に低下しました。もし終戦が一年遅かったら七百万人が餓死したであろう文字どおりの飢餓作戦だったのです。

米側の資料によれば、この機雷敷設は潜水艦等による極一部を除いてテニヤンを基地とする第二陸軍爆撃隊のB - 二九によるもので、終戦に至る五か月間に実施されました。

第一期（三月二十七日～五月二日）は、沖縄作戦の支援が主目的で呉・佐世保の両軍港と陸軍輸送の根拠地広島港に機雷を敷設して、これから諸港からの艦船の行動を妨害すると共に、下関海峡を封鎖して日本艦隊が九州西方を廻って沖縄防衛に急航するのを阻止しようとするものでした。三月二十七日夜九十二機のB - 二九が、初めて下関海峡に機雷を投下したのを手始めに五月二日までに同海峡および呉、佐世保、広島に計一、三五八トンの機雷が敷設され、第一期中にこれらの海域で船船十九隻が触雷沈没し、三十九隻が損傷しました。

対日機雷戦（1942年10月～1945年8月）



ちなみにB - 二九は八〇〇キロの機雷十二個を搭載してテニヤンから往復できる性能を有しておりました。

第二期（五月三日～五月十二日）は、下関海峡を封鎖するとともに東京、名古屋、神戸大阪の諸港及び瀬戸内海的主要航路を閉鎖し日本の重要産業地域間の海上交通を破壊することをねらったもので、一、四二二個の機雷が敷設され五月中に阪神港で二十一隻が沈没

又は損傷した外、下関海峡経由で瀬戸内海に入っていた朝鮮満州からの船舶が本州日本海側の港に回航しなければならなくなりました。

第三期（五月十三日～六月六日）は、主として本州北西部日本海側の諸港と北九州の諸港の閉鎖のため約三千個の機雷が敷設され、終戦までに一二〇隻の触雷船を生じました。

第四期（六月七日～七月八日）は、下関海峡と阪神港一帯の閉鎖が続行され、三、五四二個の機雷が敷設されるとともに、当期から海軍飛行艇（P B 四 Y - 二）が沖縄を基地として主として朝鮮沿岸に一八六個の機雷を投下しております。

第五期（七月八日～八月十五日）は、下関海峡及び本州日本海側の港湾、北九州諸港の閉鎖を続行するとともに朝鮮沿岸の釜山、馬山、元山、興南、清津の諸港にも合計三、七四六個の機雷が用いられ、飢餓作戦全期間を通じて本土周辺に一、二七七個の機雷が投下されたこととなります。

海軍航路啓開部長で退官され、石川研究所の所長になられた田村久三氏の談によれば、これらの機雷は第二次大戦で米海軍が公募した多くのアイデアの中から制式採用されたもので、いずれも共通の機雷缶を使用しパラシュートで水面に落下した後海底に待機し上を通る船の特性に感応して爆発する仕組みになっており、日本周辺に使用されたのは次の五種に大別できるのであります。

磁気機雷二種は発火装置が、電話の継電器方式と放電管方式の違いこそあれいずれも船体のプラス・マイナスの磁場変化に感応するもので、目標、水深等に合わせて感度やプラス・マイナスの間隔、炸薬量などを選択使用します。

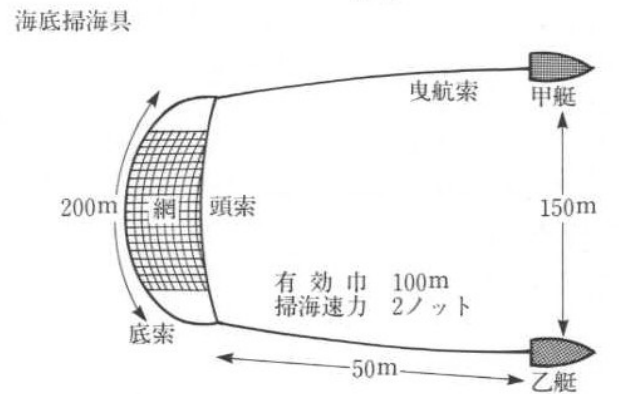
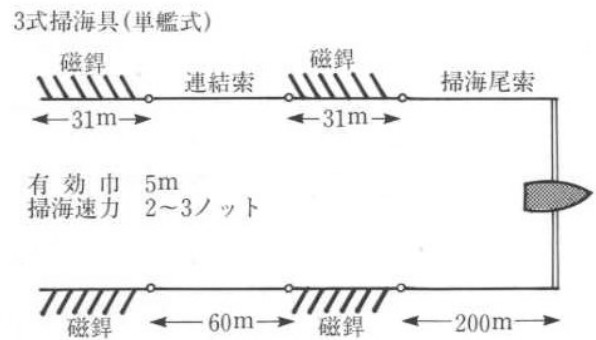
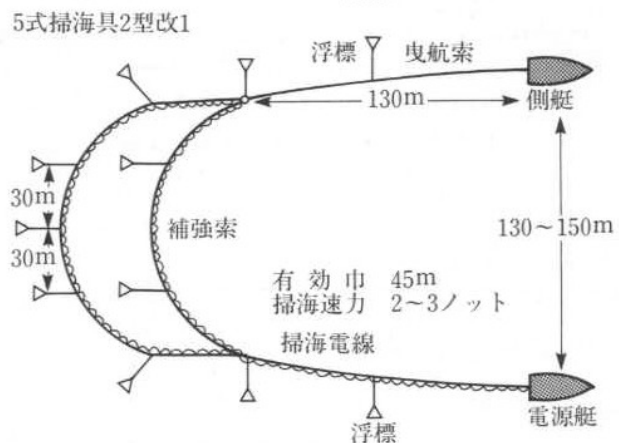
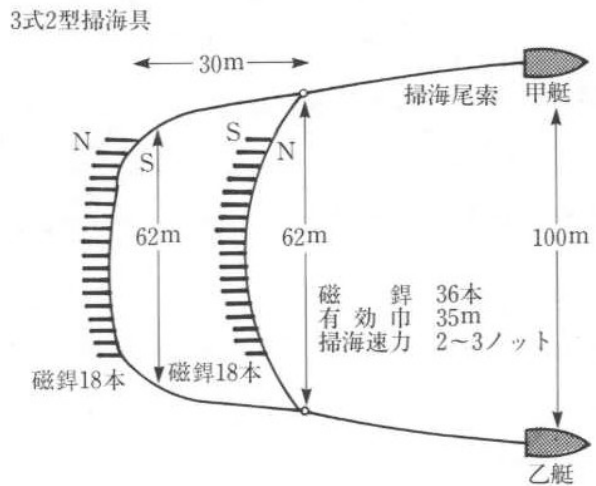
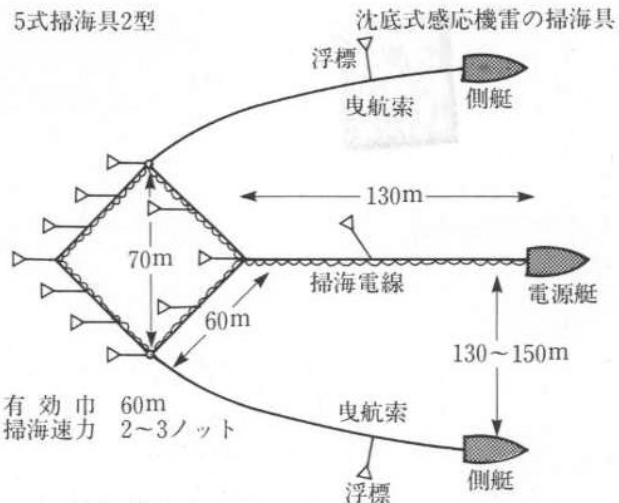
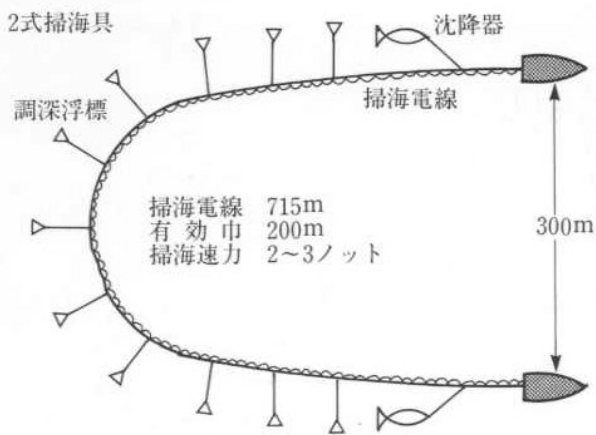
音響機雷も機械室の中周波の音に感応するものと推進器の発する低周波に感応するものと二種類あり、後者は掃海が困難でした。

最後に磁気水圧機雷は船が起す水圧の変化で爆発するもので波浪で自爆しないよう船の磁気変化と組合せてあり、これも掃海が困難でした。

以上の機雷には掃海を空振りさせるよう何隻目の船が来た時に爆発するか予め調定できる回数起爆装置があり、また一定期間機雷を眠らせておく作動遅延装置や自滅装置を結線していないものもあり厄介な代物でした。

米海軍兵器局の機雷専門家のグループで編成された機雷改良班がテニヤン島に進出して米陸軍航空部隊と協力して対日飢餓作戦の指導に当たったとあります。目標艦船の種類や掃海等の情報に基づき日本側の掃海の裏をかいて大型船をねらえるよう機雷を調整することが彼等の任務だったのでした。

これに対して、わが国では昭和十四年第二次欧州大戦にドイツが航空機によりテムズ川に磁気機雷を敷設したことに着目してこの機雷の研究を始め、昭和十六年十月通電式の磁気掃海具を完成するとともに船体磁気を打ち消す舷外電路装置の成案を得ました。同十七年南方で取得した英式磁気掃海具を利用して磁棒式の三式磁気掃海具を実用化し、また横浜在泊中のドイツ船ドッガーバンクから譲渡を受けた感応機雷や昭和十八年南方各地で取得した各型式の磁気機雷について対策を研究し昭和十九年八月ようやく木造船三隻で曳航する通電式の五式掃海具を実用化したのであります。



しかしながら前述の飢餓作戦で述べたように次々と新型機雷を混入した大量敷設が行われるに及んで応接に暇なく国を挙げたの努力にも拘らず有効な対機雷策を得ないまま国力は急速に低下し遂に敗戦を迎えるに至るのであります。

米軍の敷設した一万一千個の機雷のうち終戦までに掃海により処分したもの一、三二七個、自爆したもの一、五六三個、誘爆七六個、陸上処分六七八個、触雷五一三個の計四、一五七個で、残りの約六、六 個が未処理のまま海底に残存したことになります。

二、終戦処理業務

昭和二十年八月十五日わが国は未曾有の敗戦を迎え、混乱と虚脱の最中に立たされました。この時当時の徳山港湾警備隊司令岡戸大佐は隊員を集めて次のように訓示されたのであります。

「諸子は今日までわが重要港湾の掃海作業に日夜辛酸をなめたのであるが、終戦を迎えた今日この時から、更に本格的な掃海隊員としての仕事が始まることを覚悟しなければならない。これがわれわれ掃海隊員に課せられた責務であり、国家同胞に報いる所以である。」と。

岡戸司令の訓示のとおり、この時から掃海作業の性格が従来の戦争目的遂行の作戦行動から「ポツダム宣言」履行の終戦処理業務、ひいては平和日本建設の航路を啓開する使命へと転換するのであります。

九月二日、連合軍最高司令部一般命令第一号によって日本政府は連合軍の海軍代表の指示の下に掃海作業を実施することになり、九月中旬から横須賀、呉、佐世保各鎮守府及び大阪、大湊各警備府がそれぞれ現地米国海軍代表の指示に従って掃海作業を開始し、さらに十月には下関海峡及び日本海方面の掃海を再興するに及んで、海軍省軍務局内に掃海部を、また地方に六つの地方掃海部と十七の地方掃海支部を設置して組織的な業務態勢を整備し、海防艦等十五隻、木造の駆特・哨特五十四隻その他徴用漁船等を含む艦艇三四八隻、海軍軍人約一万人の陣容で米軍残存機雷六千余個と日本海軍が敷設した五万五千個の防備用係維機雷の掃海作業に取り組んだのであります。

このような状況下にあつて断腸の思いは、十月九日釜山からの駆逐艦栗、蓮の遭難電報に接した時でした。両艦は釜山港において米軍から港内の敷設機雷の清掃確認を強制され徒手空拳丸腰のまま同港内及び航路を高速で航走し遂に九メートルの浅瀬で次々と触雷沈没すと。

更には十月五日室蘭沖で係維機雷掃海中の敷設艦新井崎が触雷して乗員九名が殉職し、十月十一日には周防灘で徳山掃海支部の真島丸が触雷し八名が殉職、十月二十六日玄界灘で博多掃海支部の第二新生丸が触雷三名殉職、十一月十六日には朝鮮海峡掃海中の海防艦大東が轟沈し西部艦長以下二十六名が殉職、翌二十一年一月二十五日にも壱岐で駆特二四八号が触雷し伊勢艦長以下十四名の殉職者を出すなど悲報が相次いだのであります。

かかる中にも北は宗谷海峡から重要港湾、水道、南西諸島に至るわが係維機雷の掃海は米海軍の協力もあつて昭和二十一年八月十七日をもって終了し、処分機雷は判明したもので四、八一八個を数えました。

ここで終戦後の掃海の後方支援面に眼を転じて見ますと、掃海要具を始め船体機関等の整備補給は、終戦処理業務のため接收を免れた旧海軍の在庫品に加え関係者のご努力により優先的に補給、修理等の措置が講じられ、社会一般の物資の欠乏をよそに業務の遂行に事欠くようなことは一度たりともありませんでした。最も苦心したのは要員の確保と申せましょう。敗戦に伴う社会的混乱の中にあつて良心的な掃海を行うには、心身技量共に勝れた掃海要員の確保が第一であり、復員を希望する乗員を説得して危険な掃海作業に支障なからしめた幹部の苦労は並々ではありません。しかし一旦復員してみても娑婆の厳しさのわかった交代要員が得られるようになって艇内の空気も落ち着いて来、諸給与、掃海手当、その他、補給、福利厚生面の改善や、日本再建のための掃海的重要性を強調する当局の涙ぐましい物心両面の努力が払われたことを付記しなければならぬと思います。特に田村掃海部長の対大蔵折衝は特筆すべきでしょう。

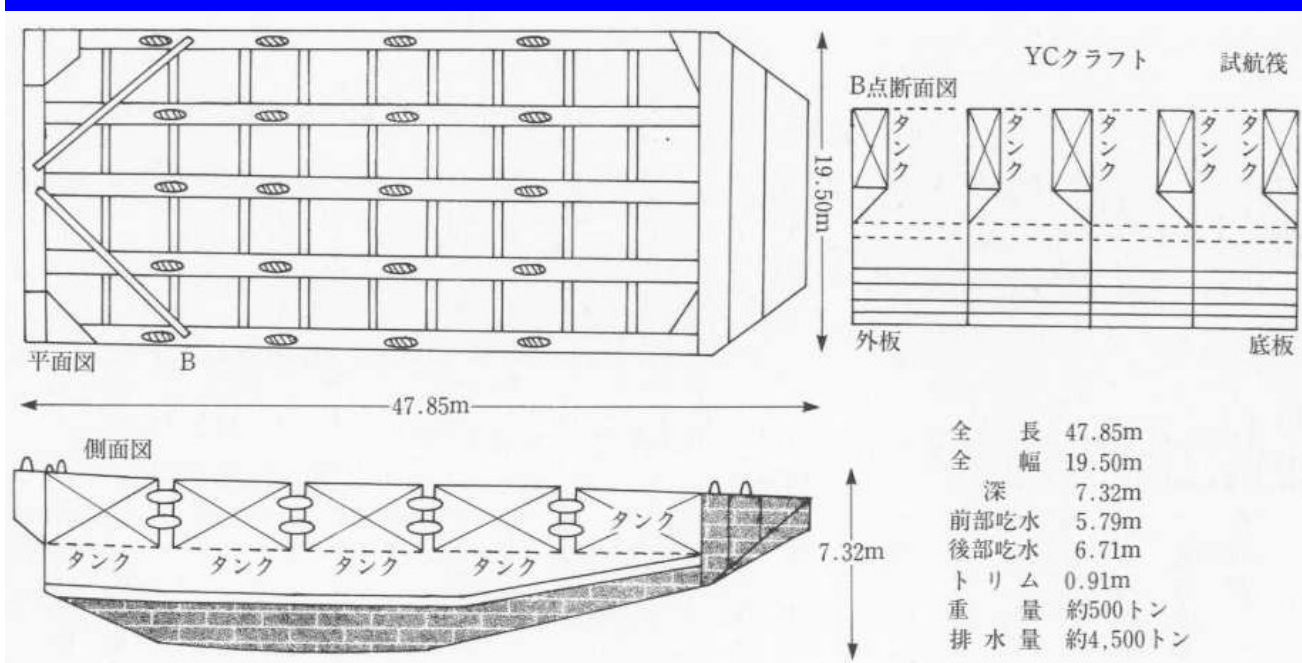
係維機雷の掃海が完了すると海防艦等の乗員から逐次縮小し、感応機雷掃海の方へ優先順序に従って人員の集中が行われ、旧軍関係者の公職追放や米側から全掃海関係要員の五十パーセント削減の指令もあり昭和二十一年八月末には総数四、四六九名となりました。更に昭和二十三年一月復員庁が廃止された時点で掃海関係要員は一挙に一、五八名に激減し、特に、パーシブ該当者二五名については同年六月から毎月五パーセントあて削減の指令が発せられ翌年三月末までに一二五名に半減し、その後も削減を強く主張する民生局と掃海作業の遂行のため解任延期を申請する日本側、更には日本掃海隊の優秀性・重要性を十分認識している米極東海軍司令部の進言もあり数次に亘るきわどい交渉を繰り返して遂に昭和二十六年九月のサンフランシスコ平和条約の調印を経て昭和二十七年の講和発効、公職追放解除でこの解任問題も自然消滅の形となったのであります。以上で後方支援のお話を終りまして感応機雷の掃海に戻りたいと存じます。

わが国周辺に敷設された一万一千個の機雷の内訳は磁気機雷四、四七二個、音響機雷三、二七個、磁気水圧機雷三、二四個でその内約六、六個が残存していることは前述のとおりであります。

感応機雷の掃海を計画するには先ずその死滅時期を承知することが先決問題でした。昭和二十年十月掃海再興のとき米国側の口頭指示では各種感応機雷とも翌昭和二十一年二月中旬頃には自滅するとのことでした。ところが二十年十二月二十日付米国側の感応機雷の掃海に関する覚書によれば、音響機雷のみは昭和二十一年二月中旬頃自滅するが、磁気及び磁気水圧の複合機雷は相当長期間危険であるとのことでした。

そこで問題の磁気水圧機雷の掃海対象としてクローズアップしたのがＹＣクラフトと試航船で、戦時中日本でも水圧板などを研究しましたが僅かに海底掃海具のみが成果を挙げた程度でした。戦後米国から輸送し組み立てられたＹＣクラフトは排水量四、五トンの試航筏で、海防艦二隻で五・五節で曳航、送電しその水圧とコイルの磁場により処分するものですが、機雷二個処分した結果船体に被害を生じ返還しました。

試航船は戦時中の日本側の処分船のアイデアに基づくもので、米国ではリバティ型などの標準船に装備を施しGinea pig ship “モルモット船”と称して終戦の年の十一月二十日、日本側に対し試航船隊編成を指示し、東亜丸、栄昌丸、桑栄丸、若草丸（後に泰昭丸）の四隻が改装され、「一万円で命買います」と乗員募集のニュースが新聞に掲載される程でした。



さて磁気機雷及び磁気水圧機雷の掃海計画は改めてさきの覚書に基づいて立案することとなり、これに先の係維機雷の掃海もつけ加えた総合掃海計画を二十一年一月二十五日付で樹立し、一斉に掃海を実施したのであります。その計画とは北は北海道沿岸から西は博多に至る七十二の港湾、航路、水域を網羅したもので、この計画はその後掃海の進捗に伴ってその都度米国側の指示があり、数回にわたり相当大きな変更が加えられました。しかし大体において瀬戸内海に重点を置き、特に下関から大阪に至る一貫主要航路を速やかに啓開することを主眼としたもので、主な計画の変更は次のようなものでした。

- (1) 昭和二十一年四月臨時閉門掃海部隊が編成され、下関、唐津へ日本海方面から駆潜特務艇、哨戒特務艇を集中したこと。
- (2) 昭和二十一年六月から二か月以内に徴用漁船五十四隻を解傭し、掃海部を日本海方面は舞鶴のみとし、瀬戸内海方面では神戸、大竹、下関の三か所で掃海を行うこととなったこと。
- (3) 昭和二十一年十二月十四日、日本海方面の掃海を中止したこと。
- (4) 昭和二十二年一月二十九日、日本側の追加申請によって下関第二水道を加えたこと、及び従来磁気掃海は同年七月末、試航は同年十二月末完了するよう指令されていたのを、同年七月以降更に下関方面主要航路の拡張及び枝航路を追加し、磁気掃海は昭和二十三年五月末、試航は同年六月末完了に変更があったこと。

こうして昭和二十二年末をもって係維機雷及び感応機雷の第一次掃海計画並びに第二次掃海計画の一部の掃海を終了し、米国側の指令により復員庁の廃庁に伴い翌年一月一日に掃海関係は運輸省に移管されることとなったのであります。

復員庁時代の思い出は、ほろ苦い初恋の味に似ております。私は昭和二十年十月大湊防備隊の機雷長に着任し、室蘭、八戸沖の係維機雷の掃海に従事した後、昭和二十一年三月秋田県船川港の磁気掃海のため駆潜特務艇五隻を率い夜航海で船川港に入港した直後に下関回航の大湊復員局長の命令を受けました。家族を大湊に残して来た乗員にとってこの命令は騙し討ちと映ったかも知れません。大湊では埒が開かず東京と直接交渉の結果総司令部の命令で総ての駆潜特務艇は下関に集合することになったとのことです。それなら一旦大湊に帰って乗員を入れ替えた上でと強く要望する艇長を説得し、一回も掃海具を投入しなかった船川港を後に新潟に回航し、ここで駆潜特務艇三隻を加え八隻の毛虱艦隊は、はるばる来たぜ下関と吉見の下掃基地に着きました。

一日も早く掃海を完了し懐かしの大湊に帰りたい乗員は朝早く甲板を流しながら出港準備にかかり、夕闇とともに美しい単縦陣で入港する毎日でした。

しかしながら乗員の切なる願いも虚しく昭和二十三年の仕事始めは北九州若松港の掃海でした。掃海艇十隻が洞海湾を舷々相摩す編隊掃海により四日間確認掃海を行い、八幡製鉄に鉄鉱石や製品を積んだ船が直接出入港できるようになりました。

女王丸の触雷があったのはこの直後であります。それまでも昭和二十年十月七日、関西汽船の別府航路で室戸丸(一、二五トン)が触雷沈没し四七五名の犠牲者が出ましたが、終戦直後のことでもあり新聞の隅に小さく掲載されただけでした。関西汽船の女王丸(四一トン)は一月二十八日岡山県牛窓沖の未掃面で触雷沈没し一九三名の犠牲者を出しました。

事態を重視した米側から播磨灘北航路の航行禁止が出され、各部からの要望に応じて同航路と牛窓方面の掃海を第二次掃海計画におり込み、九州海運局掃海部から掃海艇十二隻を派遣し中国海運局掃海部長の掃海指揮下に入れるとの決定がありました。

二月二十五日選りすぐった十二隻の掃海艇は九州海運局長の寸志を戴き勇躍下関を出港し岡山県宇野港に回航し、玉野着をもって中国海運局掃海部長の一部指揮下に入り二か月余りにわたり女王丸の弔合戦にかかります。小豆島西航路、牛窓航路、播磨灘北航路が当面の掃海目標です。三月二十七日近畿海運局掃海隊六隻を加え総勢十八隻、玉野は時ならぬ掃海ブームに湧きました。

四月三日（土）週末玉野に回航し補給休養で寛いでいると地元の野崎組の若い者と乗員との間で酒の上の傷害事件があり、相手方の組頭が来たり騒々しくなりました。翌朝花束を持って野崎組の門をくぐると組頭が出て来て奥へ招じられ、熊の毛皮の座布団に親分と初対面の挨拶を交しお見舞いを述べ、掃海業務の特殊性について駄目を押し玉露一服ご馳走になって辞去しました。玉野ではその後も乗員が刺されて重傷を負う事件があり、仲裁に立った大親分の処で古式に則り手打式を行ったことがあります。

三、運輸省、海上保安庁時代

復員庁の閉庁に伴い佐世保にあった掃海監部が廃止され、それまで在佐世保艦隊司令部に提出しその許可を得て直ちに実行していた掃海計画も、運輸省所管となってからは日本政府関係各省部へ事前に提案しその審議承認を経た政府案を東京の極東海軍司令部に提出することに改められ、その内容も掃海の必要性、予算、掃海完了区域の設標計画まで含んだものを求められ、この米国側の指令により掃海関係渉外機関の東京復帰となったのです。運輸省に移管された掃海船艇は試航船二隻、駆特、哨特を含む総計五十一隻、人員千五百人でした。これにより下関地方掃海部は九州海運局掃海部に、乗員の身分は運輸省事務官等へ変わったとは云え寧ろない掃海業務の明け暮れでした。機雷を処分して帰ると部長から清酒一本が届き、ドックに入る際は主計長から工員への心付用に煙草一カートンが渡されました。大湊派遣隊は同年七月二十日付下関掃海部に転籍となり苦勞を共にした艇長四人及び大湊復帰を希望した一部乗員との決別を迎えました。呉復員局長から大湊復員局長に宛てられた感謝電を掲げます。

大湊派遣掃海隊は隊員一同終始一貫元気旺盛克く作業に邁進し大なる成果を上げり、特に実働率の優秀なる点においては他にその比を見ず之偏に隊員一同の熱意の然らしむる所にして深く敬意を表す。茲に閉門一貫航路の磁気掃海完了に際し派遣隊員一同の勞苦を多とし、貴局の御協力に対し深甚なる謝意を表す。

今にして思えば身に余る厚遇と申すべきでしょう。しかし乍ら終始炎熱の艦橋を降りることなく操艦に当たり、入港しては乗員の統制に腐心し、夜はよもすがら機関の整備試運転に明け暮れた拳句、大湊帰郷後病没された駆特二二号齊藤艇長及び同一八一号羽田艇長始めそのご遺族の上に思いを馳せると今もなお胸が痛むのであります。

昭和二十三年五月一日海上保安庁が発足し掃海関係者は海運総局から海上保安庁に移管され、下関の掃海艇十二隻と阪神の掃海艇六隻は広島海上保安本部掃海部に転籍します。

六月十日播磨灘北航路で初の機雷を処分し、同二十三日大久保長官の巡視があり掃海隊に乗艇されて掃海状況を視察、七月二十三日には運輸大臣が来隊されました。宇野棧橋に艦付けしてお迎えする掃海隊員を前に指揮官艇の天蓋上に立たれた大臣は「私がただいまご紹介に与りました岡田勢一であります。」と落ち着いた切り出しで、乗員一同の将来には何一つ不安のない旨協調され日本復興の先達として掃海隊の自愛と努力を要望されました。運輸大臣のお見送りを受けて出港する掃海艇の後甲板から期せずして帽振れが起こり、大臣も之に応じて最後の一隻が出港するまで終始天蓋上に立って帽振れにこえられました。指揮官艇の事務室で乾杯の間、掃海は昭和二十五年八月まで存続の要がある旨お話があり人の和を第一にせよと激励の辞を戴きましたが、玉野まで来られて唯一掃海隊のみに立ち寄られた大臣でした。

仮泊地でも楽しい思い出があります。長島湾の虫明に仮泊し地元野球チームと親善試合をした折り、帰艇すると大勢の子役さん達がやって来て前甲板を舞台に慰問演芸が始まります。出し物は、お志どり笠、名月赤城山、大利根月夜等々。虫明最後の夜は町役場に挨拶しアットホーム、各艇探照灯振り方。

昭和二十三年十月十九日神戸港外において掃海部隊の観閲式が行われました。参加したのは観閲船栄昌丸と掃海艇十八隻で栄昌丸の観閲官大久保長官一行に対し掃海艇の陣形運動、掃海作業展示が行われ、挨拶に立った米海軍掃海部隊指揮官バーズ中佐が「日本掃海隊の掃海完了区域では事故皆無である。」と祝辞を述べました。

この頃磁気機雷の寿命について新たな情報が伝えられ、少なくとも昭和二十七年八月頃迄は危険がある、結局機雷缶体が腐蝕浸水するまでは危険性が存続する見込みであり、中には炸薬にトーベックスを装填したものがありこれは衝撃に対して鋭敏で掃海が終了しても浚渫等海底作業には注意を要するとのこと。

昭和二十四年は備後灘の掃海にかかり観音寺を基地として新居浜航路の掃海を実施中、二月三日関西汽船の新居浜丸（三

五三トン)が触雷したので掃海艇で観音寺港内に曳航擱坐させ、敷設線掃海により同月十日更に機雷一個を処分して新居浜丸の仇を報じました。五月二十三日下関海峡満珠島東方海面掃海中のMS二七が触雷沈没し機関員四名が殉職、重軽傷三名を生じ、僚艇のMS一七も損傷浸水しました。この事故を契機に掃海艇の船体磁気測定、消磁対策、主機・発電機の艦橋遠隔操縦、前甲板に待避所増設等の諸対策が強力に推進されました。

六月九日牛窓沖の未掃面で鉄骨木船の第三辰鹿丸(三 五トン)が触雷擱坐、鋼材を積んでいたことから磁気機雷と判断しました。

昭和二十五年三月天皇陛下の四国行幸がありご寄港先の小豆島土庄港の掃海を完了、十五日行幸当日は播磨灘の掃海を実施しつつ遙拝を行いました。三月三十一日は御召船山水丸が四国から神戸にお帰りの余次、和泉灘で掃海部隊の御親閲を忝うしました。呉・下関の三十二隻の掃海部隊は二列縦陣で登舷礼を行い、陛下は悪天候を冒して御召船の甲板にお立ちになり大久保長官のご報告に掃海業務の成果を嘉せられたと洩れ承っております。四月玉野方面の掃海をもって内海掃海は一段落を迎え、米軍の稚内掃海への協力や伊勢湾の中山師崎航路の掃海にかかるのであります。

六月一日海上保安庁の機構改革が行なわれ第一乃至第九管区海上保安本部に航路啓開部が置かれ掃海艇は各管区に分散配属されることになりました。航路啓開部の任務も従来の掃海・処分業務に加えて沈船その他航路障害物の除去や海中の爆発性危険物の処理、陸上で発見された機雷の除去処理、日本海方面の浮流機雷対策等広範多岐にわたることとなりました。

四、朝鮮掃海

昭和二十五年六月二十五日朝鮮戦争が勃発し北朝鮮軍は三十八度線を突破し怒涛の進撃を開始しました。戦後五年ぶりに北九州地区に空襲警報が発令され、東京湾と佐世保港の日施掃海の指令がありました。当時は伊勢湾の掃海中で部屋を借りていた鳥羽の大家さんが「いよいよ貴方達の時代が来たぜ」と言われたことを思い出します。

朝鮮戦争について少し経過を追ってみますと、一年前の六月に五百人の軍事顧問団のみを残して在韓米軍が撤退し手薄になった間隙に乗じて、北朝鮮はソ連・中共の同意を得て民族解放戦争の旗印の下圧倒的な装備と兵力をもって一挙に席卷を図ったと思われれます。これに対して米国は問題を国連安全保障理事会に持ち出し国連決議に基づき全面介入に踏み切りました。マッカーサー元帥は直ちに朝鮮に飛び既に京城も陥落した最前線に立って決死的な作戦計画を樹て、日本駐留の米軍を空路前線に急派し北朝鮮軍の進撃を阻止しようとします。然し多勢に無勢国連軍は後退に後退を続け、八月になると釜山を中心とする橋頭堡を辛じて確保するに過ぎずダンケルクの二の舞いも日時の問題かと思われれました。

この間米軍移駐後の空白を埋め、また海上警備力の強化のため七月八日七万五千人の警察予備隊と海上保安庁の八千人増員が認められました。

マッカーサー元帥は前述の朝鮮の戦勢を打開するため九月十五日米第十軍団を似て仁川地区に奇襲上陸を敢行し忽ち京城を占領し、北朝鮮軍の補給路を絶つとともに、北から第十軍団、南方から第八軍をもって挟み討にし劇的な大逆転に成功します。敗走する北朝鮮軍を追って国連軍が三十八度線を越えて進撃せんとする十月二日、大久保長官は米極東海軍参謀副長のアーレイ・バーク少将から北朝鮮の敷設機雷の危険性について説明を受け、国連軍が困難に遭遇した今日、日本掃海隊の助力を借りるしか方法がないと要請を受けました。

終戦直後に出された連合軍最高司令部一般命令第一号に「日本国及び朝鮮水域における機雷は連合軍最高司令官所定の海軍代表の指示に従い掃海すべし」という降伏条項はあるが、現に戦争が展開されている朝鮮水域にかかわることであり、事は急を要するので長官は直ちに吉田首相に報告して指示を仰ぎました。吉田総理はバーク少将の提案に従うことを許可しました。なお当時はダレス特使がしばしば来日し日本としては講和条約の締結前で、国際的にも微妙な立場にあったので、この日本特別掃海隊の作業は秘密裡に行うこととされたのであります。

直ちに派遣掃海艇の門司集結の電令が下り、呉・下関・大阪の掃海艇十隻と母船一隻は六日釜山に向け出港、また小樽・名古屋・呉・新潟の掃海艇九隻も準備でき次第引続き出港と決まりました。朝鮮海域掃海部隊の総指揮官は田村航啓本部長、首席指揮官付に池田監理課長、各隊指揮官は山上七管区航路啓開部長(以下略称)、能勢五管区、石飛九管区、萩原二管区、石野一管区の各部長及び大賀・花田の両指揮官並びに試航船泰昭丸星子船長、後に同桑栄丸山下船長が任命され、また処分艇として巡視船四隻が編成に加わりました。朝鮮水域の掃海隊を「特別掃海隊」と呼称し、国旗に替えて万国信号E(特別任務)旗を掲げるよう指定されました。

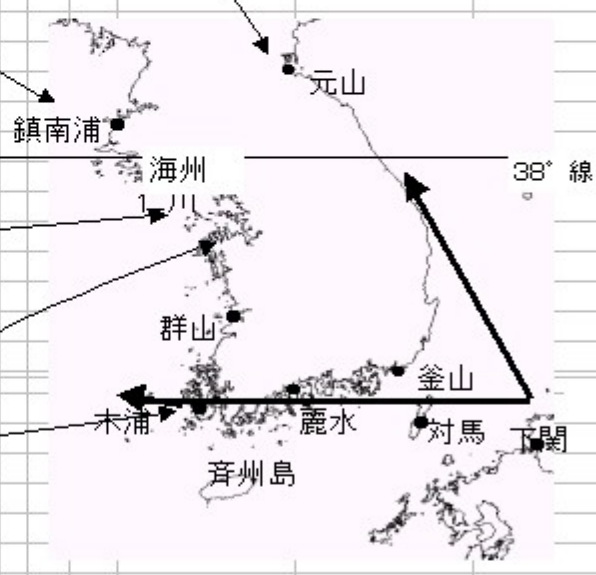
特別掃海隊 (95.66部隊)
掃海概況表

縦指揮官 田村久三

掃海部隊名	第2(第2次)	泰照丸	掃海部隊名	第2	第3	第1(第2次)
指揮官	石野自彊	星子直明	指揮官	能勢省吾	石飛 町	花田賢司
船名	MS 62,23,22,57,09,13 15,10,21,03,06,09	泰照丸	船名	MS 62,03,06,14,17	24,19,01,06,16	24,19,02,04,06,07
	PS 56			PS 02,04,08	02,04,08	48
参加員	348	58	参加員	207	152	101
掃海期間	11/7~12/8(23d)	18/11~30/11(13d)	掃海期間	10/10~18/10(9d)	18/11~30/11(13d)	22/11~4/12(13d)
掃へ泊係維	36	0	掃へ泊係維	0	67.35	0
海へ地磁気	0	0	海へ地磁気	0	24	0
区間航係維	90.1	79	区間航係維	2.4	2.75	25.2
域へ路磁気			域へ路磁気	1.5	36.4	0
処分機雷数	2	0	処分機雷数	3	5	0
損失	0	0	損失	MS14	0	0
				触雷沈没(7/10)		

掃海部隊名	第1	第4次(第2次)
指揮官	山上亀三雄	大賀良平
船名	MS 20,02,04,07	21,03,06,08
	PS 3	56
参加員	116	121
掃海期間	11/10~30/10(21d)	1/12~6/12(6d)
掃へ泊係維	139	40
海へ地磁気	0	0
区間航係維	82.4	63
域へ路磁気	0	0
処分機雷数	15	0
損失	0	0

掃海部隊名	第4
指揮官	萩原晏四
船名	MS 25,22,30,10,11,12
	PS 0
参加員	101
掃海期間	22/11~4/12(13d)
掃へ泊係維	0
海へ地磁気	0
区間航係維	1.6
域へ路磁気	1.6
処分機雷数	3
損失	MS30
	座礁沈没(27/10)



この晴天の霹靂のような朝鮮掃海に出動する乗員の気持はどうだったのか。石野指揮官の手記によれば、当初の心情としては「今更何で朝鮮まで出掛けて死の危険を冒してまで掃海せねばならないのか」という疑問によって動揺した時期もあったが、出動の経緯並びに政府の意向を聞いて占領下の日本の置かれた立場を納得し、直ちにとられた諸処置と戦局も好転して制空権、制海権は国連軍が確保している安心感、さらに今まで寝食苦楽を共にしてきた気心知れた仲間と一緒に行動するという気安さが、朝鮮行を拒んで職を去りこの厳しい世の中でどうしようかと悩むよりは良いという選択、それに加えて船乗りは物事をあまり深刻に思いつめない板子一枚下は地獄と言った締観を持っていること等が朝鮮行に同意させたものではないか、と述べています。

出動に先立って、特別掃海隊に所属する者は本任務中二倍の給与を受けると及び朝鮮海域にある間の補給は米海軍において担当することが明らかにされました。このGHQ指令に基づき日本政府は運輸大臣から海上保安庁長官に対して特別掃海隊の朝鮮水域派遣を下令し、十月六日午後ここに長官の出動命令が下ったのであります。

本隊のうちどりと第2特別掃海隊七隻は対馬海峡で元山宜候の針路を指定され、先陣切って元山沖に到着し十二隻の米軍掃海艇と共に十月十日掃海を開始しました。十月十二日米軍掃海艇二隻が相次いで触雷轟沈しましたが機雷原の全容はなお判りませんでした。あとで判ったところでは元山にはソ連製の磁気機雷と係維機雷合せて三千個が敷設されていたと云い、米第一海兵師団の上陸は十月二十五日まで阻害され北鮮軍の退路を絶つ作戦は失敗に帰したのです。元山掃海隊は各艇無線封止、夜間は灯火管制下に機雷の危険と深海のため、潮流と風浪の中で終夜漂泊しなければならず極度の緊張もあって乗員は疲労の極に達していました。

十月十七日永興湾の上陸泊地の掃海を命ぜられ対艇掃海実施中のMS一四が一五二一麗島灯台の二四四度四千五百米の地点で係維機雷に触れ瞬時に沈没し、死者一名、重軽傷者十八名を出しました。負傷者は米艦に収容され手厚い手当てを受けて佐世保に送還されましたが、吃水の深い駆特型で浅深度の係維機雷を掃海するには甚だ危険で緊急会議の結果、吃水の浅い舟艇を使用して小掃海を実施した後に日本掃海隊を使用するよう米軍に申し入れました。これに対し浅吃水艇は当時米軍に二隻しかなく上陸作戦の遅延している戦場における焦りから米軍上級司令部は「予定の如く掃海せよ」と命令して来ました。十八日再度小掃海の実施を要請し折衝中、米軍上級司令部から「十五分以内に抜錨内地に帰れ、然らざれば十五分以内に掃海に掛れ・・・」との命令が出ました。時間は少い。残るといふ艇を後に、第二特別掃海隊指揮官以下三隻の掃海艇は「帰る」と云って、米艦が砲口を向けているさ中を急速抜錨し、機械の始動の間に合わない艇は横抱きにして元山沖を発ち下関に向かったのであります。出港してゆく三隻に対し後のことも考慮し田村総指揮官から「内地に帰投せよ」との指示が発せられました。

MS一四とこの三隻の補充として新たに石飛隊の五隻が派遣され十一月下旬には花田隊が到着して一部補充交代を行い十二月四日をもって元山の掃海を打ち切ります。

その他、仁川には山上隊五隻、平壤の外港鎮南浦には石野隊の十三隻と泰昭丸、郡山には萩原隊七隻、海州には大賀隊五隻がそれぞれ派遣され所在国連軍艦艇と協力して掃海任務に従事し十二月初旬北朝鮮における戦局の急変により特別掃海を集結いたします。朝鮮掃海はMS一四が触雷沈没し郡山でMS三 が坐礁沈没する等幾多の教訓を得ましたが、米極東海軍司令官ジョイ中將は特別掃海隊の功績を称えるにウエル・ダン（天晴れ）の賞詞をもってしたのであります。

朝鮮掃海に従事した大部の人々の心境は、特別掃海隊解散に当り時の海上保安庁長官大久保武雄氏がいみじくも訓示された。

” 国際社会において名誉ある一員たるためには手を拱いてはその地位を獲得できない。我々自らの努力と汗で名誉ある地位を獲得しなければならない。今日諸君の努力により困難を克服して偉大な業績を上げ、国際的信頼を得るとともに日本の進むべき方向を確認した。日本の歴史上永く記録さるべきもの ” で占領からの脱却、独立国日本の実現、奇蹟の復興に何等かの寄与をしたという誇りではないでしょうか。

五、恒久平和のために

いよいよ航路啓開業務も大団円を迎えようとしています。しかし朝鮮戦争の後遺症とも言うべき日本海の浮流機雷対策や海中からの爆発物件の引揚げ解撤作業に対する監督業務が新たに生じました。

昭和二十四年三月にも新潟県小泊海岸に浮流機雷が漂着爆発し付近の民家や住民に多大の損害を与えたことがありましたが、朝鮮戦争が勃発後急激にその数を増し、日本海沿岸の都市や港湾関係者から死活問題だとしてこれが対策の強い要望があり、津軽海峡では青函連絡船の運航を中止する事態にまで進展しました。この事態に対処するため昭和二十六年四月、日本海方面浮流機雷搜索隊を編成し、浮流機雷の哨戒搜索処分に当たるとともに海流瓶等により海象観測を行い機雷情報の入手、警告を行い、昭和二十七年までに、一、二八一件の発見情報に対し四八一個を処分し、航行船舶の安全を確保し民心の安定に寄与しました。

一方、コマーシャルサルベージの監督業務は朝鮮戦争の軍需景気で漁民などが、終戦時付近の海中に投棄された陸海軍の砲弾などを無断で引揚げスクラップにしようとして爆発事故が相次ぎ社会問題になったのを契機に駐留軍から、これら海中の爆発性危険物の民間業者による引揚げと解撤作業全般について、入札契約から、違法引揚げ解撤の取締り、承認された解撤工場に対する監督指導に至るまで航路啓開部の所管と指定されたもので、これまでの掃海のベテランが海上保安官の制服で司法警察職員として調書作成に当る場面も散見されたのであります。今考えてもこれは大変な業務で、海中に一旦投棄された砲弾を国有財産として更めて払下げ入札契約し、人命の危険を伴う解撤作業のマージンを定め、廃棄や解撤不能弾薬の外洋投棄の監督など前例のない業務を遂行できたのも海軍人事部・経理部・補給造修出身のベテランなればこそと思います。

次に、航路港湾の安全宣言について申し上げます。安全宣言とは、機雷の掃海が完了し総ての船舶の航行に対して安全である旨告示することであり、占領下においては、例えば敷設機雷の回数起爆装置が八回の場合、磁気掃海を縦横各九掃面実施し、試航船により更に一掃面航過した後、米軍掃海隊によるチェックスイープ（確認掃海）が行われて始めて極東海軍司令部から発せられておりました。朝鮮戦争が始まって以来、米軍掃海隊のチェックスイープの実施が望めなくなり、折から全国主要商港都市から外国船直接導入の強い要望があったので、昭和二十六年三月運輸大臣からGHQあて、米側のチェックスイープを行うことなく重要港湾の安全宣言発布方を申請しました。これに対し同年十月八日付で、掃海実施の責任が日本政府に移される旨通達があったので、日本政府は自主的に掃海業務を行い、自分の責任で世界各国に対し安全宣言を発布することとなりました。

米海軍水路告示による安全宣言は、昭和二十四年一月十九日付の関門港及び若松港から同年十一月二十四日付の別府港まで六海域で、わが国の航路告示による安全宣言は、昭和二十七年一月四日付内海一貫航路から同年六月七日までで百七十か所を数え、わが国の産業、経済の発展復興に大いに寄与したことは申すまでもありません。殊に終戦後日本側で掃海した海

面からは未だ一回の触雷事故を出していないことは特筆すべきでしょう。

終戦以来七か年に垂んとする掃海作業の業績とわが海運再建への貢献が各地官民の認識するところなり、混沌たる終戦後の世相の中で、黙々と身の危険をも顧みず掃海作業に挺身し不幸中道にして壮烈な殉職を遂げた七十八柱の尊い犠牲者に対し、その当時の事情として公葬も行うことが出来ず、その後も絶えて追悼の機会さえ得られなかったことが更めて想起されました

昭和二十七年四月二十八日平和条約が発効してわが国が独立国となり且は航路の安全宣言の権限も日本側に移されたこの好機に、海上平安にゆかりの琴平の地をとし掃海殉職者顕彰碑を建立し、国家再建の尊い礎石として散った殉職者の偉業を永く後世に伝えその霊を慰めると共に各遺族代表をお招きして慰霊祭を執り行うこととなり、趣意書発起人には瀬戸内海国立公園及び観光事業促進協議会々長の岸田幸雄氏を始め、全国三十一の港湾都市の市長が名を連ね、六月完成を目途に準備が進められました。



掃海殉職者顕彰碑の建立については吉田総理大臣も諒とされ、堆い揮毫依頼を措いて碑文を認めて下さったと聞いております。なお顕彰碑の除幕式と慰霊祭は昭和二十七年六月二十三日小雨の中で挙行されましたが、肝腎の顕彰碑はまだ金刀比羅宮の石段の中途までしか登っていませんでした。除幕式に間に合わなかった理由は、香川県の庵沼町で一番大きな石材を選定したため、琴平までトレーラー輸送するのに途中の橋という橋を次々補強する要があったからだと聞いております。

神社当局の好意により慰霊祭は年中行事の一つとして毎年五月二十七日定例的に実施されて来ましたが、現在は呉地方総監主催により掃海部隊が集合して盛大に挙行されておりますことは感謝に堪えないところであります。

ここで掃海殉職者の叙勲について申し上げますと、終戦後復員庁までの殉職者は戦公死として叙勲の手続きがとられ既に靖国神社にも合祀されていることが確認されました。ところがそれ以後の殉職者九名は手続ミスのため叙勲の申請が行われていなかったことに気付いたのが昭和四十二年だったと思います。尔来十二年海上保安庁の粘り強いご尽力と大久保元長官、池端元第六管区海上保安本部長並びに石川研究所の岡光所長の一方ならぬお骨折により昭和五十四年十月一日、実に殉職後三十年ぶりにして叙勲のご沙汰があったのであります。

思えば昭和二十六年九月八日サンフランシスコ平和条約の調印が行われました日、吉田首相は自らの責任で日米安全保障条約に調印しました。昭和二十七年四月、わが国は独立を回復し、時を同じくして横須賀で海上警備隊が呱呱の声を上げます。五月独立式典と全国戦没者慰霊祭が執り行われ、六月掃海殉職者顕彰碑の除幕式、七月コマースパージュの監督業務を海上保安本部に移管します。八月一日保安庁警備隊が発足し航路啓開部は航路啓開隊となり、掃海艇は警備隊唯一の保有船艇となりました。昭和二十八年九月呉航路啓開隊は呉地方基地隊となり、十一月豊後水道における応用訓練で桑栄・駆特・哨特をもって第一船隊群の警備船P F隊の前程に浮遊機雷をばらまいて、吉田群司令をして「やられたか」と言わしめる一幕もあり、かくて昭和二十九年七月一日呉地方隊の開設を迎えるのであります。

皆様ご承知のとおり終戦から朝鮮戦争を経て海上自衛隊が成長する過程は、正しく日本が自由陣営の一員として立上るチャンスを掴んだ際どい針路選択の時期と申せましょう。当時の騒然たる世情の中で新しい海上防衛力に生まれかわる航路啓開隊員の心境に紆余曲折があったことを覚えます。やがて掃海艇も親鋭のMSC・MSBに替り、昭和三十年「はしま」が宇部沖で機雷を処分したのに続いて、同三十一年「うじしま」が姫島沖で、昭和三十四年MSB二号が下関南東水道で機雷二個を処分します。更に昭和三十六年「ひらど」と「あただ」が苅田、宇ノ島沖で各一個、同三十七年「えたじま」が霧の襟裳岬沖でレーダー掃海により潜水艦の敷設した磁気機雷を処分しました。

今やわが国は自由世界第二位の国力に発展し、米国に対してもよきパートナーとして影響力を行使できる迄になりました。世界の恒久平和に携わる海上自衛隊の益々の自戒と精強を祈念して拙いお話を終わります。

あとがき

極力誤りなきよう下記の資料等を参照しましたが何分匆忙の間舌足らずや記憶違い等杜撰の謗りを免れず、文責はすべて筆者にあることをお詫び申し上げます。

海軍水雷死史

航路啓開史

海上自衛隊二十五周年史

海鳴りの日々（大久保武雄著）以上